

## 観光地としての中華街 神戸南京町とロンドン中華街を比較して

### The role of tourist destination Chinatown

#### — Focusing on comparison between Kobe Nankin Town (Japan) and China Town London (UK)

中尾 清\*      百武仁志\*\*  
NAKAO Kiyoshi   MOMOTAKE Satoshi

要約：本稿は中華系商店のクラスターである中華街について、国際比較を通じて観光資源としての役割を明らかにすることを目的としている。中華街は世界中に点在しているが、今回は神戸の中華街である神戸南京町とロンドンの中華街である China Town London(ロンドン中華街)の比較分析を行った。結果、中華街は中国を理解する身近な観光地としてスタディーツーリズムの役割も担っているのではないかという結論に至った。

キーワード：観光資源、神戸南京町、ロンドン中華街 (China Town London)

## 1. はじめに

サンフランシスコの中華街や横浜中華街など世界各地には多くの中華街が存在する<sup>1)</sup>。中国には昔から三把刀<sup>2)</sup>という思想があり、この思想に基づいて海外で成功した人々＝華僑が互助会を結成し、新世界での活動を容易にしてきた歴史がある。そして、その華僑が集まってきた形成した街が中華街である。中華街は中国を離れ新世界で活躍しようとする華僑の一大活動拠点となり発展してきた。まさに中華街は中国出身者のために存在するかのようであった。しかし、欧米ではオリエントへの魅力が昔から強かったということもあり、また、安く食べられる（もちろん高級品もあるが）料理は中華街がある都市の住民の胃袋を満たすようになった。そして中華街は中国出身者のための街から地域の人々が訪れる街へと変貌していった。世界的に観光に注目が集まる現在、この中華街はどこか異国情緒溢れる街としてどこの国や地域でも人気スポットとなっている。

現在、観光資源としての中華街を分析している研究はいまだ少数しか見られず、また、中華街の形成に関する歴史を示した文献も多くはない。そこで本稿では観光資源として中華系の商店のクラスターである中華街の国際比較を通じて、中華街の役割を明らかにする。

## 2. 問題意識

### (1) 問題意識

本稿は中華系商店のクラスターである中華街について、国際比較を通じて観光資源としての役割を明らかにすることを目的としている。そこで、まず、商店のクラスターである商店街についての定義を明らかにし、その後、観光資源の定義について明らかにする。そして現在の中華街がどのように形成されているのかについて明らかにするため、神戸の中華街とロンドンの中華街の現状を明らかにし、その後観光資源としての中華街の比較を行う。

### (2) 商店街とは

商店街は英語では Shopping Street というが、商店街は一般的には商店が集積している地

---

\* 大阪観光大学名誉教授 \*\* 大阪観光大学

区や建ち並んでいる通りのことをいう。満園勇によれば、商店街は「全体の利害調整が原理的に難しく、組織としての活動がそもそも得意ではない」もので、「商店街は自然発生的な商業集積であって、業種・規模・能力・意欲・資源がバラバラな商店の集まりであり、それぞれは独立した自営業者として自律的な経営を行っている<sup>3)</sup>」というものである。中華街は中華系の商店の集合体であり、中華系商店街ということもできる。しかし、三把刀という思想から集まってきている集団であり、満園勇が述べているように「全体の利害調整が原理的に難しく、組織としての活動がそもそも得意ではない」というものではなく、この点では他の商店街とはその性格を異にする。

### (3) 観光資源とは

観光資源は学者によって定義に若干の違いがある用語である。例えば須田<sup>4)</sup>は観光資源を「観光の対象、観光行動の目的となるあらゆるもの」と定義しており、足羽<sup>5)</sup>は「観光対象（人の観光意欲をみたすすべてのもの）から観光事業体の供給する財貨とサービスを取り除いたもの」と定義している。また、溝尾<sup>6)</sup>は観光資源とは、①今後とも価値が減じない資源と、②将来の価値が保証されるとは限らない資源を指す」としている。

そこで本稿では観光資源を「今後とも価値が減じないもののその保証はない観光のディスティネーションになるもの」と定義することにする。

### (4) 研究の対象

上記を踏まえ、本稿では商店街としての中華街が観光資源として過去から現在までどのようなディスティネーションであったのか、その役割についてフィールドワークを踏まえて明らかにする。

## 3. 神戸の中華街（神戸南京町）

### (1) 神戸南京町の歴史

1868（明治元）年の「兵庫開港」に伴って「神戸外国人居留地」の建設を進めたが、造成が一気にできなかつたため、「居留地」の周辺に日本人と外国人が共に住む「雑居地」が認められた。

「兵庫開港」となると、直ぐに長崎在留の清国人十数人が大阪・神戸に移ってきて売買いを始めた（『神戸開港三十年史』明治31年5月刊、480頁）が、当時は日本と清国は通商条約を結んでいなかったため居留地内で売買や居住することはできなかった。そこで、居留地の西北隣に中国人街ができ始めた。これが在神華僑の始まりである。

そして、欧米人達は中国人による「買辯<sup>ばいべん</sup>」という制度を日本人との商取引に取り入れたので、どうしても中国人の「買辯」制が対外貿易に必要であった。

「買辯」制というのは、欧米諸国は、急に門戸が開放された日本の事情が十分把握できていなかったため、日本の大商人を保証商人に取り立てようにも信用状態を把握することが出来なかった。そこで、保証商人に中国人を採用したのである。

特に銀行「買辯」などは銀行の建物内部に、辯房とよぶ買辯使用人の業務空間が設けられており力を持っていた。この「買辯」制は日清戦争時の華僑引き上げが契機となって衰退したものの、廃絶は第二次世界大戦まで持ち越されたと言われている。

1871（明治4）年の日清通商条約の締結からは、「居留地」や現在の「栄町通」や「トアロード」周辺などに、貿易会社を設立したり、日本人と混在して住んだりした。特に中国人（華僑）

が多かった。現在でも会社名は、貿易業「〇〇商行」などとして残っている。

そして、「買辯」をはじめ欧米人の使用人やいわゆる「三把刀」といわれている中華料理業（包丁）、理髪業（髪ハサミ）、洋服仕立業（たちバサミ）、呉服業、雑貨業、塗装業、印刷業、豚肉業、鶏肉業、塗装業、印刷業、ペンキ屋などに従事する者も多く、その多くが集まって住んだのが居留地の西側、栄町一丁目の神戸南京町である。

在日清国人は1871（明治4）年には240人、1894（明治27）年には1004人に増えた。そして、神戸南京町は彼らのための朝市が開かれる商店街として発達し、『神戸南京町市場』と呼ばれた。また、トアロードの両側及び中山手通二丁目、三丁目、下山手通三丁目付近には、中国人の密集住宅街があった、といわれており、1980年代までその名残りがあった。

栄町一丁目の神戸南京町は、もともと道幅が狭くかつ道路が悪いので、ひとたび雨が降るとぬかるみ、出歩くことも出来ないほどであった。また、住民は一軒の家を板仕切りして、幾人もが生活しており、スラム街のようであった、ともいわれている。

1899（明治32）年頃、神戸南京町に居住する特に日清両国商人は、神戸南京町の発展を計るため、そして、衛生の面から資金を出し合い、石畳の道路に改造している。また、中山手通りに『神戸華僑同文学校（現神戸中華同文学校）』を開設し、子弟の教育に力をいれた。教育の充実に伴い医者や薬剤師への道に進む者も次第に多くなっている。

昭和の初め頃、この神戸南京町はますます栄え、在留華僑が6千2百人を超えたといわれている。このころの神戸南京町であるが「南京町市場」といわれたように生鮮食料品や中華食材、日常雑貨品などの店が並び、中華料理屋は少ない。白地は会社や住宅が密集していたようである。

元町通 一丁目																																														
前田豆腐店	平尾鶏肉店	中華料理品芳齋	理髪店	中華料理	ゲタ屋	黄昌記豚肉	美華軒公和	中華料理大塚樓	泉松記豚肉店	中華料理博愛	森谷牛肉店	鳥利	露記雜貨	吉村乾物	田崎ロウソク	高橋ハム	萬利号雜貨	久保タバコ	柴田青果	クリーニング	中華雜貨店	天島氷屋	金納タマコ	魚元	開発煎豆	豆腐店	山根荒物	田中漬物	常盤	八百仁																
佐々木自転車	カシワ	タバコ	簡藤池雜貨	老祥記(アマン)	明治屋	南 京 町												金城樓	丸共生果	黄崇亮	タバコ屋(中人)	西田漬物店	藤原果物店	藤原乾物	漢方薬萬安堂	何老呂	林正(雜貨店)	中華料理第一樓	萬生堂漢藥	福源昌(米)	鳥又	廣堂仁漢藥	瀨戸食品	蓮池青果	中華料理興種	錦刈タマコ店	公生豚肉店	奥田乾物	海老槌	辰日精肉	大正堂菓子	柴田食鳥	メシヤ	黄光記	鍛冶屋	朝鮮銀行
												栄町通 一丁目																																		

出典：(呉宏明他編著)『神戸南京町と神戸華僑』松籟社、2015年発行、30頁

1945年の神戸大空襲で、神戸南京町は一軒も残らず焼失した。戦後はバラックの建物が建ち始まり、徐々に木造建築に建て替わったが、20軒あまりの中国人の店があるに過ぎなかった。1950年に朝鮮戦争が勃発すると、外国船の船員やアメリカ軍の兵隊などを対象とした「外人バー」が林立し、市民の夜間などの歩行は敬遠されるようになり、寂れていった。1952年の講和条約により日本が主権を回復し、米軍も引き上げだしたが、1960年にベトナム戦争が勃発、「外人バー」は続いた。1974年ベトナム戦争終結前に神戸港が全面返還され「外人バー」の閉店が相次いだ。神戸南京町は寂れた商店街になってきたが、まちは落ち着きだし、人々

も徐々に戻ってきて、神戸南京町再興への動きが始まった。

1970年代半ばに地元関係者を中心に「神戸南京町を考える会」が結成され、神戸南京町の再開発を神戸市に陳情した。神戸市もそれに応えて、神戸南京町の再興、異国情緒あふれる街並みの整備による「商業観光地化」が進められるようになった。

1981年に「神戸南京町復興環境事業実施計画」が策定され、翌年から整備事業が開始された。まず、1982年に「神戸南京町」の名前を掲げた南楼門（海栄門）が完成した。1983年、この中華街はそれまでアスファルトだった街路を、石と平瓦の舗装にやり替え、楼門やランタンを新しく作り、神戸南京町広場も完成し、中国風の街並みもほぼ完成し、商店などの施設もオープンし、ファッショナブルな中華街へと変貌した。

1995年頃には25軒以上の中華料理店や店があり、神戸の顔として、多くの観光客が訪れ始め、北野異人館街に次ぐ観光地になっていった。

## (2) 現在の神戸南京町とそのまちづくり（あらまし）

広く知られているとおり「神戸南京町」は1980年代中頃に「ショッピングと観光」のまちとして、見事に復活を遂げてきた。1990年神戸市都市景観条例により神戸南京町沿道は「都市景観形成地域」に指定され、翌1991年、地域の約130世帯より神戸南京町景観形成協議会が結成された。そして『神戸南京町沿道景観形成地区—景観形成の手引き』を定め、神戸市と協力して整備事業を進めている。「神戸南京町」のまちづくりはこれを基本として進められ今日に至っている。冊子化された『手引き』のあらましは次のとおりである。

### ◇はじめに

私達のまち神戸南京町は、神戸港の開港にともなって中国系在留民の居住地として形成され、古くから中国雑貨・飲食店・食料品店などが軒を連ね、異国情緒あふれる品々の並ぶ個性的な商店街として発展してきました。

平成2年、神戸のシンボルにふさわしい景観形成を図るため、神戸市都市景観条例に基づく神戸南京町沿道景観形成地区の指定を受けるとともに、翌年7月、景観形成市民団体として神戸南京町景観形成協議会が認定され、市当局をはじめ関係機関の支援のもと、街路・広場の整備や楼門・あずまの建設等さまざまな環境整備事業に取り組んできました。

その結果、異国情緒豊かな飲食店などの増加や春節祭の龍踊りが全国的に有名になるなど、横浜・長崎と並ぶ日本の三大中華街の一つとして、再び商店街の賑わいが戻ってきました。平成7年の震災後は、いち早く「まちづくり計画」を策定し、市や関係機関と協働して、さまざまな復興への取り組みを続けてきました。また、平成18年には、景観法に基づく景観計画区域に指定されました。

この冊子は、当地区で新たに計画される建築物等に対して、まちづくりの方針やルールをご理解いただき、景観形成に寄与するものとなるよう、計画をする上で配慮すべき事項をまとめたものです。この冊子を活用し、創意・工夫にあふれたデザインにより、私達のまち神戸南京町をより快適で個性的なまちにさせていただくことを願っています。

### まちづくりの目標

- ①「グルメ」が基本のまちづくり
- ②「本物」思考のまちづくり
- ③「街」ごとに楽しめるまちづくり
- ④「もてなし」のまちづくり
- ⑤「クリーン」なまちづくり

### まちづくりの方針

環境の快適化	まちの修景・美化	情報発信できるまちに
魅力ある出店への誘導	本物の食のまちに	店や来客のマナー向上
夜間のまちの魅力の増進	放置対策と駐輪スペースの確保	集客の向上

◇神戸南京町沿道景観形成地区 景観計画附図



◇景観形成配慮事項（建築物等）

- ① 屋根・庇（美しく個性的なシルエットをつくる）
- ② 外壁（明るく多彩な表情をつくる）
- ③ 一階の用途・形態（通りに賑わいと広がりを出す）
- ④ 付属物等（神戸南京町らしい異国情緒や賑わいを高める）
- ⑤ 緑（うるおいを増やすための創意工夫をする）

◇景観形成配慮事項（屋外広告物）

街並みや建築物は、一体化、装飾、スカイライン、規模、装飾、一時的、文字、照明など、調和をとること。

「神戸南京町」での成功に刺激されて、多くの中国人が住んでいた「トアロード」周辺では、1980年代の末頃に「第二神戸南京町」構想がうまれたが、その後立ち消えになった。現在「トアロード」の両サイドには、ハイカラな店やレストラン、ホテル、高級マンションなどが並び、「北野異人館街」へ通ずる神戸らしい「観光・ショッピング街」になっている。また、旧神戸中華同文学学校の跡地は、NHK 神戸放送局の斜かいのトアロードに面したタワーマンションの南西の『トア公園』の片隅に戦災で破壊された旧校舎の煉瓦を積んだ『モニュメント』と説明板がある。この周辺は、完全に日本に同化して、中華の残影は、その『モニュメント』と兵庫県庁の西にある『関帝廟』、多数の中華料理店以外感じるところはない。

1995年1月の「阪神淡路大震災」は、神戸南京町にも大きな被害をもたらした。建物は、全壊が8、半壊・一部損壊は全体の約5割に及んだ。「電気・ガス・水道」の不自由な中、被災市民に温かいものを、ということで、被害の少なかった店は、いち早く開けたり、屋台（出店）などで食事を提供し、被災市民を元気付けた。

現在神戸南京町は、「商業・観光地」になっており、居住する人はほとんどいない。中華料理店、中華雑貨店、中華食材店、洋食や和食の店、喫茶や洋菓子店、肉屋、魚屋、八百屋、豆腐屋、居酒屋など、その他画廊や楽器店、ホテル、会社など約150軒あるが、3分の1が「神戸南京町商店街振興組合」に入っていないという。

「阪神淡路大震災」以降、屋台（出店）が常態化し、神戸南京町の景観を損ね、観光客の増加や賑わいをもたらした反面、立ち食いや歩きながらの飲食、ごみのポイ捨てなどのマイナス面も生じた。そして、屋台（出店）等での飲食については、「神戸南京町商店街振興組合」では、マップやチラシ、ポスターなどで注意を喚起し、屋台（出店）での回収をするように

して、環境美化に注意している。



出典：『南京町案内図』神戸南京町商店街振興組合発行

### (3) 神戸南京町でのツアーやイベント

神戸南京町への観光客の入り込みであるが、残念ながら統計は取られていない。時々出かけて見ているが、平日で来街者は多い。そのほとんどが観光客であると推定できる。また、ツアーの動向であるが、多くが「北野異人館」「港」とセットにして「神戸南京町」にやってくる。また、春と秋の観光シーズンやイベントのときには、観光客であふれんばかりである。そして、中学・高校の教育（修学）旅行やグループ学習・異文化体験の場となり、制服姿も目につく。

そして、多くが「屋台（出店）」で、点心や飲み物を購入し、食べ歩きをしている。有名な中華料理店は、来店者も多く、繁盛しているが、そうでない店は、屋台（出店）の影響もあり、苦戦しているように見受けられる。ある意味「オーバーツーリズム」であり「オーバーショップ」の状況にある。

イベントであるが、「ランタンフェア」「中秋節」「春節祭」「興隆春風祭」が四大イベントである。「ランタンフェア」は、「神戸ルミナリエ」の協賛イベントとして「神戸ルミナリエ」の前日からクリスマスごろまで開催、1996年から始まり、「中秋節」は、1998年から旧暦の8月15日にあわせて2～3日開催している。「春節祭」が一番古く、1987年の旧正月に第1回を開催し、「昭和天皇崩御」「阪神淡路大震災」の年を除いて毎年開催（例年旧正月の前後数日。年によって変わる）している。新しいイベントは、2007年から開いている「興隆春風祭」（毎年3月、現在は4月の日曜日の1日）である。

いずれのイベントも演目は変わるが、獅子舞、龍舞、太極拳、花架拳、中国舞踊、中国歌謡、二胡演奏などが行われる。まち中にランタンを飾りつけ、夜には灯りが入れられ、エキゾチックな街並みに映え、獅子舞や龍舞にあわせた楽器や二胡の演奏が聞こえ「中国の夜の街」に誘ってくれる。狭い「南京町広場」を中心にイベントは行われるので、観客は超満員である。また、中華料理店をはじめ屋台（出店）は、観光客で超満員の盛況となる。

#### (4) 神戸南京町の特徴分析

- ① 最初の中国人は、1868年の兵庫開港により、長崎から十数人がやって来て売買を始めた商人であり、欧米人と日本人の商人との間での貿易を取り持つ、いわゆる「買辯」としてやってきている。  
その後、一般労働者（「苦力」という。）や「三把刀」の職人などが「雑居地」に住み着いた。彼らを「華僑」という。華僑は、1871（明治4）年の日清通商条約の締結からは、「居留地」や現在の「栄町通」や「トアロード」周辺などの「雑居地」に、日本人と混在して住んだ。
- ② 華僑は、日本で苦勞し、努力を重ね、日本社会に溶け込み増えてきたが、日清戦争、満州事変、日中戦争などで、一時的に減少した。太平洋戦争の神戸大空襲では、日本人とともに壊滅的な大打撃を受け、人的被害も多く、財産も失うなど艱難辛苦を味わっている。
- ③ 戦後、奮励努力して立て直し、「華僑・華人」として日本社会で確固たる地位を確立している。「阪神淡路大震災」後の「神戸南京町」の復旧・復興への立ち上がりは、被災神戸市民に元気を与えてくれた。
- ④ 現在に神戸南京町は、デザインは中国風の観光地で、単なる「飲食の場」「物見遊山の場」になっている。「四大イベント」等を除き、「中国の歴史・文化の場」に乏しい。神戸における「中国の歴史・文化の場」は、少し離れた「中国華僑歴史博物館」「関帝廟」や「中華義荘」（長田区）、「孫文記念館」（垂水区）でしか観ることができない。
- ⑤ そして、観光客の増加は、飲食関係の消費に好結果をもたらしているが、地区全体には「オーバーツーリズム」の状況をきたし、一部の飲食関係を除き、屋台（出店）を含め客単価が低く、競争も激しく「オーバーショップ」の状況を呈している。

#### 4. ロンドンの中華街（China Town London）

China Town London（以下、ロンドン中華街）は、ヨーロッパでは最も大きな中華街であると言われ、イギリスロンドンのSOHO地区に隣接した立地の良い場所に存在している。このロンドン中華街に関する研究は殆どなされておらず、British Libraryでもその所在を確認することができなかつた。しかし、ロンドン中華街の互助会については多少の資料が残っていた。なお、日本では一般的に存在する観光マップも存在しておらず、ロンドン中華街を特集したマガジンなども確認することができなかつた（2019年8月現在）。このようなことから、ロンドン中華街がどのような歴史でどのような商店のクラスターとなっているのか、また、どのようなイベントが行われていてどのような観光客が訪れているのかなどの現状を分析し、研究を深めていくことは重要であると考えられる。

##### (1) ロンドン中華街の歴史

ロンドン中華街が現在あるSOHO地区のジェラート通りは17世紀のロンドン大火の後に建設された。この当時はまだ中華街とはなっていなかつた。そして18世紀に入るとイギリス東インド会社の社員として初めて中国人がロンドンに現れた。もちろん船乗りとしてである。1840年にはイギリスが中国の清王朝から香港を引き継いだこともあって、ますます多くの中国人がロンドンに来ることになった。このようなこともあって、中国人船乗り向けの商売が行われるようになっていった。そして1880年代に入ると、ロンドンで初めての中華街がEast Endに形成されていった。18世紀には中国人従業員が初めてライムハウスに定住した。その後中国人コミュニティとして船乗り向けのレストランや商店がランドリーも含めて少な

くても 30 店舗は 1914 年までに営業していった。

第 2 次世界大戦中はナチスドイツの空爆のお陰で East End の中華街、ライムハウスは多大な損害を受けたため、現在の SOHO 地区の西に移動し始める。

第 2 次世界大戦後の中国人コミュニティの収入は少なく良い環境で住んでいなかったが、1950 年代にナイトライフを提供したり、安価な商店でイギリス人の評判を得ることができた。また、極東から帰還した軍人が昔を懐かしんで中華料理や中華系スーパーマーケットに夢中になった。このようなこともあり、East End から遠く離れた華僑起業家をひきつけ、今日の中華街が誕生することとなった。ちなみに当時は約 2000 人の中国人がイギリスに渡った。

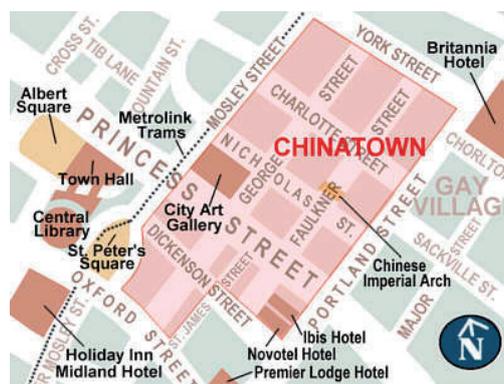
1960 年後半になると、ロンドン中華街は中国人コミュニティの中心地としての地位を確立した。そしてイギリス領香港から多くの中国人労働者が訪英した。その数は数万人に上ったといわれている。この影響もあり、極東の旅行代理店が増え続け、また、労働者にサービスを提供するレストランや商店などが所狭しと営業していた。

1970 年に入ると、「The Strange Community of Gerrard Street」というタイトルのデイリーテレグラフに、中華街のレストランだけのエリアから、中国式理髪店、中国式美容室、中国式ミニタクシー、中国人会計士事務所、中国系書店や図書館、中国系スーパーマーケット、中国への旅行を提供する会社、さらには商工会議所を提供するコミュニティへ進化していったと書かれた。また、この中華街では中国人の子供たちに母国語を教え、故郷とのつながりを維持するための民族学校を開設したりなどしたりした。そして、これは British Library にも資料として残っているが、1978 年になるとロンドン中国チャイナタウン協会が設立された。

1980 年代になると現在のロンドン中華街が確立する。中国式の門（碑楼）、通りの中国式の家具、パビリオンが追加され、このエリアが歩行者天国になった。そして 1985 年には中華街全体で旧正月のお祝い行事が催されるようになり今日に至っている。

## (2) 現在のロンドン中華街

現在のロンドン中華街は東アジア全域からの料理が楽しめる 100 軒近くのレストラン、薬草療法、美容院、薬剤師、リフレクソロジーの専門家、旅行代理店を含む多数のショップ、そして最も評判の高いバーやパブがひしめき合っている。



出典：<https://manchesterfeb2011.files.wordpress.com/2011/01/chinatown-map.jpg> より転載

また、ロンドンらしい一面として Bookmaker もあり、人々は様々なものに対してベットしている。さらに週末になると、コベントガーデンとまではいかないものの、大道芸人などが来てパフォーマンスを行なっている。筆者が訪英中に調査したところでは、英語以外のヨーロッ

パ言語を話す人々も多く、さほど遠くない場所でオリエンタルを味わえる拠点として人気があるようである。

さらにロンドン中華街は、中華料理に馴染みのあまりないヨーロッパ人向けにはビッフェスタイルを採用した店舗など、手軽で安く中華料理を味わえるようになっている。歴史的経緯からインド料理も本格的なものがロンドンで味わえるが、ビッフェスタイルに関しては、Euston 駅近くのインド料理のビッフェスタイルの店舗より遥かに有名であると思われる。

いずれにしても、ピカデリーサーカスの近くということもあり、東洋と西洋が融合するヨーロッパ最大の拠点として観光客が多く訪れている。

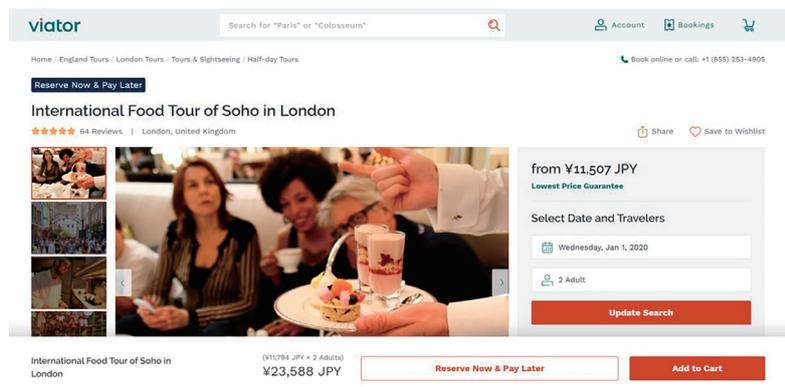
この人気の秘密は何といても写真からも分かるように西洋と東洋の折衷である。この碑楼もロンドン中華街のシンボルとなっている。



(筆者撮影)

### (3) ロンドン中華街でのツアーやイベント

ロンドン中華街のツアーは、旅行社が元々自分の国で企画したものを除いては殆ど存在していない。世界的に有名な現地ツアーのオンラインサイト、Viator（アメリカサンフランシスコに拠点があるが、2014年にトリップアドバイザーに買収された企業）には、SOHO 地区の観光として、ロンドン中華街が含まれている。これは主に食をテーマにしたものである。



Free Tours By Foot のHPにもロンドン中華街のガイドが記載されているものの、徒歩による無料フードツアー以外のツアーで中華街のみを対象としたツアーは見当たらない。



ロンドンには国際観光都市であり、現地の観光地を巡るツアーが多く提供されていることを考えると、ロンドン中華街での観光ツアーが殆どないということは、ロンドン中華街はその地を見学するというよりは中華系のサービスを楽しむ場所であると考えられるべきかもしれない。

#### (4) ロンドン中華街の特徴分析

ロンドン中華街の特徴は、国際観光都市ロンドンの商業の中心であるピカデリーサーカスにある SOHO 地区周辺にあることから、様々な国の人々が集まる観光地となっている。具体的な特徴は以下の通りである。

- ① ロンドン中華街の起源は 18 世紀、イギリス東インド会社の社員として中国人が現れ始めたことに始まる。
- ② 清国から 1840 年に香港を引き継ぐと、香港とイギリスを結ぶ航路が確立し、イギリス船に雇われた中国人船乗りがロンドンに多く訪れるようになった。これらの中国人船乗り相手の商売も盛んに行われるようになり、中国人を相手にした商店が徐々に集まってくるようになった。
- ③ この商店が 1880 年代になると East End で中華街を形成するようになった。
- ④ 第二次世界大戦でナチスドイツのロンドン空爆により East End の中華街も多大な損害を受けた。この結果、現在のロンドン中華街の西に中国商店の移動が始まった。
- ⑤ 1950 年代、ロンドン中華街ではナイトライフや安価な商品を扱う商店でイギリス人の評価を得ることに成功し、中国人のみならず、イギリス人も多く利用する中華街となっていった。
- ⑥ 1960 年代、イギリス領香港から多くの中国人労働者が訪英したことからロンドン中華街はさらに発展していった。
- ⑦ 発展著しい中華街を良い方向に向かわせるため、在英中国人で作るロンドン中国チャイナタウン協会が 1978 年に設立された。
- ⑧ 1980 年代からロンドン中華街の観光地化が進んでいった。

しかし、このロンドン中華街を観光資源として分析する研究は皆無に等しく、今後様々な研究が期待される。

#### 5. 観光資源としての中華街の比較

今まで本学の近くにある神戸南京街とイギリスロンドンにあるロンドン中華街について概要と特徴を明らかにしてきた。問題意識でも明らかにしたように、観光資源とは「今後とも

価値が減じないもののその保証はない観光のディスティネーションになるもの」である。この点から考察すると、神戸南京町は①1868（明治元）年の「兵庫開港」に伴って清国人が集まり始め、②「買辯」制の対外貿易のために清国人が必要となったことから日本人に多く雇われ集まってきた、③さらに1871（明治4）年の日清通商条約後、欧米人の使用人やいわゆる「三把刀」が住みつき、明治の中頃神戸南京町が発展していった、④1945年の神戸大空襲で神戸南京町は一軒も残らず焼失した、⑤1950年の朝鮮戦争によって「外人バー」が林立し、神戸南京町があった地区は一次敬遠されるが、1952年の主権回復、1974年の神戸港全面返還によって、再び神戸南京町が再建されることとなった、⑥1970年代半ばには「商業観光地化」が進められ、⑦1980年代中頃に「ショッピングと観光」のまちとして復興していった、⑧しかし、1995年1月の「阪神淡路大震災」で大きな被害を受け、⑨その後屋台が増加していったという特徴があった。

また、ロンドン中華街は①18世紀、イギリス東インド会社の社員として中国人が現れ始め、②1840年に清国から香港を引き継ぐと中国人船乗りがロンドンに多く訪れるようになったことから商売が盛んに行われるようになった、③そして1880年代になると East Ends で中華街が形成されたものの、④第二次世界大戦でナチスドイツの空爆により多大な損害を受け、現在のロンドン中華街の西に移動が始まり、⑤1950年代、ナイトライフや安価な商店でイギリス人の評価を得、⑥1960年代、イギリス領香港から多くの中国人労働者が訪英したことからロンドン中華街は発展していった、⑦そして1978年にはロンドン中華街にロンドン中国チャイナタウン協会が設立され、⑧1980年代から観光地化が進んでいったという特徴がある。

この特徴を比較すると、観光地化されているという点が類似しているものの、中華街の発生や元々の商売相手には相違がある。いずれの中華街も観光地としては将来にわたって価値が減ることは無いと考えられるが、その成立から考えて観光地として居続ける保証はないが、ディスティネーションとなっていることは間違いなく、この点で神戸南京町もロンドン中華街も観光地であると言える。また、現在は身近に中華風を楽しめる場又は学べる場としての役割も担っている。

## 6. おわりに

本稿で明らかにしたように中華街は今日、観光地としての側面を強く持つディスティネーションになっている。神戸南京町の場合は観光地化が進みすぎオーバーツーリズムになっている現状があるが、ロンドン中華街はロンドンの街に溶け込み、また、ロンドンの繁華街、ピカデリーサーカスに隣接していることから、ヨーロッパを中心に多くの観光客を受け入れている。

ちなみに神戸南京町とロンドン中華街の決定的な違いは、開国に合わせて定住していった清国人をルーツとする神戸南京町と、イギリス東インド会社成立や清国から引き継いだ香港から流入した清国人労働者を相手にする商売をするために成立した旧ロンドン中華街という違いがあったという発展の歴史の違いであると考えられる。しかし、三把刀を中心に発展した後は戦争や大火、自然災害などに見舞われながらも両中華街とも復興し今日のような観光地になった。

最後になるが、今日、中国本土は著しい経済発展を遂げ、社会主義国の手本となるとともに世界からも注目を集めている。中華街は、このような中国を理解する身近な観光地として

スタディーツーリズムの役割を担っているのではないか筆者らは考える。

## 註

1. 海外では、①シンガポール②バンコク(タイ)、③ニューヨーク(アメリカ)、④サンフランシスコ(アメリカ)、⑤シカゴ(アメリカ)、⑥バンクーバー(カナダ)、⑦トロント(カナダ)、⑧メルボルン(オーストラリア)、⑨ロンドン(イギリス)、⑩リマ(ペルー)が有名である。〔世界各地に数多く広がるチャイナタウン 10選〕<https://wondertrip.jp/46743/> (2019年10月22日確認)
2. はさみ(裁縫)・包丁(料理)・剃刀(理容)の3つの刃物のどれかの職人であれば、世界中のどこでも食べていけるといえるもの
3. 満園勇(2016)「商店街の歴史にみる『消費』と『地域』:『商店街はいま必要なのか』を問う」『地域経済経営ネットワーク研究センター年報』北海道大学、p.97。
4. 須田 寛(2003)『新・観光資源論』交通新聞社。
5. 足羽 洋保(1997)『観光資源論』中央経済社。
6. 溝尾良隆(2009)「観光資源と観光地の定義」溝尾良隆編『観光学の基礎』原書房。
7. "Chinatown London" <https://chinatown.co.uk/en/about-us/> (2019年9月18日確認)

## 参考文献

- 山下清海(2016)『新・中華街 世界各地で〈華人社会〉は変貌する』講談社。
- 呉 宏明・高橋晋一編著(2015)『神戸南京町と神戸華僑』松籟社。
- 林 兼正(2010)『なぜ、横浜中華街に人が集まるのか』祥伝社。
- 神戸華僑華人研究会編(2004)『神戸と華僑』神戸新聞総合出版センター。
- 林 同春(1992)『橋わたる人』エピック。
- 齋藤晴紀(2017)「観光と地域振興の観点からみた横浜中華街の変容:まちづくり事業による景観形成に着目して」『華南研究』(日本華南学会)第3巻、pp.101-138。
- 江 晨(2014)「在日華僑が作る横浜中華街の地域特性」『法政大学大学院紀要デザイン工学研究科編』3、pp.1-3。